

令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の小田原市の結果について

1 調査の目的

- (1) 子どもの体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子どもの体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子どもの体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立学校が全国的な状況との関係において自らの子どもの体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子どもの体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

2 調査対象：小学校第5学年、中学校第2学年

3 調査事項および内容

- (1) 実技調査・・・新体力テスト（8種目）
 - ①握力 ②上体起こし ③長座体前屈 ④反復横とび ⑤20mシャトルラン（または持久走：中学校）
 - ⑥50m走 ⑦立ち幅とび ⑧ボール投げ（小学校：ソフトボール、中学校：ハンドボール）
- (2) 児童生徒に対する質問紙調査・・・運動習慣・生活習慣等に関する項目
- (3) 学校に対する質問紙調査・・・子どもの体力向上に係る取組等に関する項目

4 調査実施日

- (1) 実技調査・・・平成31年4月～令和元年7月
- (2) 質問紙調査（児童生徒用、学校用）・・・令和元年7月

5 実技調査の結果

- (1) 体力合計点（平均）の経年比較

	小学校第5学年						中学校第2学年					
	男子			女子			男子			女子		
	市	県	全国	市	県	全国	市	県	全国	市	県	全国
R1	53.66	53.17	53.61	54.84	54.25	55.59	43.65	41.71	41.69	50.74	49.66	50.22
H30	54.47	53.68	54.21	55.96	54.61	55.90	41.72	40.82	42.32	49.99	48.23	50.61
H29	53.90	53.41	54.16	54.50	54.34	55.72	41.59	40.62	42.11	48.13	47.82	49.97
H28	54.58	52.92	53.92	55.65	53.69	55.54	41.56	40.14	42.13	47.61	46.89	49.56

*体力合計点：8種目の体力テスト成績を1点から10点に得点化して総和した合計点

(2) 判定分布の経年比較（男女平均値）

小学校 第5学年	A (65～80)	B (58～64)	C (50～57)	運動を苦手とする児童		D・E 合計
				D (42～49)	E (41以下)	
R 1	12.4%	25.5%	33.4%	20.1%	8.6%	28.7%
H30	14.0%	27.7%	34.1%	17.9%	6.3%	24.2%
H29	11.5%	27.0%	32.2%	21.2%	8.0%	25.9%
H28	14.8%	26.7%	34.0%	17.4%	7.1%	24.5%

中学校 第2学年	A (57～80)	B (47～56)	C (37～46)	運動を苦手とする生徒		D・E 合計
				D (27～36)	E (26以下)	
R 1	21.4%	32.0%	30.1%	11.9%	4.6%	16.5%
H30	19.4%	29.5%	30.3%	16.0%	4.8%	20.8%
H29	18.1%	25.6%	31.7%	19.6%	5.2%	24.8%
H28	15.2%	26.8%	34.8%	18.0%	5.3%	23.3%

*判定基準：8種目の体力テスト成績を1点から10点に得点化して総和した合計点を、括弧（ ）の基準によりAからEの5段階で判定する。

児童（小学校）の体力の状況は、前年度（平成30年度）と比較するとやや低下したものの、おおむね横ばいの傾向です。生徒（中学校）の体力の状況は、上昇がみられました。対象となる生徒群は小学校の時の調査（平成28）でも高い値を示していました。このことから、幼児期・学童期に獲得した体力は、以降の体力の伸長に大きな影響を与えていると推察されます。

体力判定分布（DからEの5段階判定）において、運動を苦手とする児童生徒（D・E判定）の割合の合計が小学校は28.7%でしたが、中学校では16.5%と、目標とする20%を下回りました。

市内小中学校では、「運動が苦手」と感じている児童生徒の運動・スポーツに対する興味・関心が低下し、いわゆる「運動離れ」につながらないように、技能習得や関連する体力の向上のみを目的とした体育/保健体育の授業とならないよう指導の工夫・改善を図っています。このため、運動・スポーツが持つ特性に触れることで児童生徒が自ら身体を動かすことに楽しみや喜びを感じることを重視した授業実践が市立小中学校から多数報告されています。

(3) 種目ごとの平均値 *T得点：全国平均値を50点とした時の相対的な得点を示すもの

*市記録にある印(※)は前年度より記録が向上した種目

小学校5年生	男子				女子			
	小田原市	神奈川県	全国	T得点	小田原市	神奈川県	全国	T得点
握力(kg)	16.74	16.88	16.37	51.0	15.80	16.40	16.09	49.2
上体起こし(回)	19.91	19.86	19.80	50.2	※19.43	18.64	18.95	50.9
長座体前屈(cm)	34.71	34.40	33.24	51.8	38.55	38.27	37.62	51.1
反復横とび(点)	41.20	39.81	41.74	49.3	38.81	37.68	40.14	48.1
20mシャトルラン(回)	47.85	47.31	50.32	48.8	39.12	35.95	40.79	49.0
50m走(秒)	※9.43	9.41	9.42	49.9	9.66	9.67	9.64	49.7
立ち幅とび(cm)	※148.90	149.61	151.45	48.8	143.24	143.24	145.68	48.8
ソフトボール投げ(m)	※21.30	20.90	21.61	49.6	※13.48	13.16	13.61	49.7
体力合計点(点)	53.66	53.17	53.61	50.0	54.84	54.25	55.59	49.1

前年度(平成30年度)より、記録が向上した種目が男子は3種目、女子は2種目でした。その他の種目についても昨年度の記録に近い状況にあり、男女ともに県平均値を上回りました。

一方、これまで同様「反復横跳び」「立ち幅跳び」など「筋力」「瞬発力」と関連する種目が課題となっています。幼児期や学童期は、外遊びや運動を通してタイミングよく力を発揮することやバランスを保つなどの「巧みな動き(巧み性)」を身に付けていくことが重要です。その後、遊びや運動経験の積み重ね、身体の発育などによって「力強い動き」「素早い動き」が身に付いていきます。発育・発達段階にかかわらず、学校だけでなく家庭においても日常的に身体を動かす時間を確保していくことが望まれます。

中学校2年生	男子				女子			
	小田原市	神奈川県	全国	T得点	小田原市	神奈川県	全国	T得点
握力(kg)	※29.05	28.48	28.65	50.5	※23.58	23.82	23.79	49.5
上体起こし(回)	※27.70	26.99	26.96	51.2	※23.86	23.31	23.69	50.3
長座体前屈(cm)	※45.37	44.00	43.50	51.7	※46.21	46.06	46.32	49.9
反復横とび(点)	※52.69	51.18	51.91	50.9	※47.27	46.49	47.28	50.0
持久走(秒)	409.12	399.72	398.98	48.5	※292.39	294.07	289.82	49.4
20mシャトルラン(回)	81.91	85.13	83.53	49.3	56.00	58.07	58.31	48.8
50m走(秒)	※7.81	7.96	8.02	52.4	8.68	8.77	8.81	51.6
立ち幅とび(cm)	※195.56	193.91	195.03	50.2	※167.42	168.23	169.90	49.0
ハンドボール投げ(m)	※22.29	20.27	20.40	53.3	※13.95	12.82	12.96	52.4
体力合計点(点)	43.65	41.71	41.69	51.9	50.74	49.66	50.22	50.5

前年度(平成30年度)より記録が向上した種目が男女ともに7種目あり、全国・県の総合判定を上回る結果となりました。

特に「ハンドボール投げ」では、大幅に記録が伸びました。近年、小中学校の体育授業において積極的に投運動を扱っており、成果が表れていると捉えています。

なお、スポーツ庁は体力の状況が低下したことについて、「スマートフォンなどを見る時間が長くなることによる運動時間の減少が体力低下につながった」としていますが、本市中学生の結果からは相関は認められませんでした。

6 質問紙調査の結果

(1) 児童生徒質問紙調査の結果から

小学校第5学年	回答	男子 (%)		女子 (%)	
		小田原市	全国	小田原市	全国
運動が好き	好き・やや好き	90.0	93.3	87.2	87.6
体育の授業は楽しい	楽しい・やや楽しい	93.2	94.7	92.3	91.3
体育授業の目標が示されている	示されている・時々示されている	89.8	83.9	93.0	83.9
授業で学んだことを振り返る活動を行っている	行っている・時々行っている	86.3	66.5	89.8	67.9
保健体育授業で助け合う活動を行っている	行っている・時々行っている	90.5	86.6	93.6	90.1
体育授業で友達同士やチームで話し合う活動を行っている	行っている・時々行っている	91.3	86.7	94.2	87.2
保健体育授業で自分に適した場や練習を選んで活動を行っている	行っている・時々行っている	74.2	68.3	78.1	69.3
平日、テレビやDVD、ゲーム機、スマートフォン、パソコンなどの画面を見る時間	3時間以上 うち、5時間以上	50.6	39.1	36.1	28.9
		24.5	15.5	13.8	9.3

中学校第2学年	回答	男子 (%)		女子 (%)	
		小田原市	全国	小田原市	全国
運動が好き	好き・やや好き	89.3	89.4	78.8	79.2
保健体育の授業は楽しい	楽しい・やや楽しい	90.7	89.4	82.8	83.6
保健体育授業の目標が示されている	示されている・時々示されている	96.3	89.7	96.1	89.1
授業で学んだことを振り返る活動を行っている	行っている・時々行っている	89.6	75.3	91.0	77.6
保健体育授業で助け合う活動を行っている	行っている・時々行っている	94.3	89.5	95.1	92.9
保健体育授業で話し合う活動を行っている	行っている・時々行っている	92.4	86.0	92.9	87.0
保健体育授業で自分に適した場や練習を選んで活動を行っている	行っている・時々行っている	77.5	68.2	76.3	67.7
平日、テレビやDVD、ゲーム機、スマートフォン、パソコンなどの画面を見る時間	3時間以上 うち、5時間以上	48.8	37.7	47.1	35.4
		15.8	12.2	15.2	10.4

体育/保健体育の授業で、「目標を示す」「学んだことを振り返る」「適した場や練習を選んで活動する」ことで児童生徒は見通しを持ち、選択したり比較して考えながら活動できるようになります。また、「助け合う活動」「話し合う活動」を取り入れることで、仲間を助けたり協力して課題を解決したりしようとする態度を身に付けていきます。本市の児童生徒の回答の結果から、児童生徒が意欲的・主体的に授業に取り組んでいることがわかります。

「運動が好き」と回答した児童生徒の割合は全国を下回るものの、小5女子・中2男子の「体育/保健体育の授業が楽しい」と回答した児童生徒の割合は全国を上回る結果となりました。体育の授業が楽しいと感じている児童生徒の割合が高いことは本市の特長であり日常の体育学習が児童生徒にとって充実したものとなっていると捉えています。今後も一層の体育学習の充実に努めていきます。

テレビやDVD、ゲーム機、スマートフォン等の画面の視聴時間は、小中学校とも全国平均を大きく上回っています。対象となる全ての児童生徒の約半数が、平日3時間以上を視聴時間に充てています。このような子供たちを取り巻く急激な社会変化の中であって、全ての児童生徒の運動機会を確保することができる学校体育は、運動・スポーツを通じた健康づくりの視点からも大きな役割を担っていると捉えています。

(2) 学校質問紙調査の結果から

小学校・中学校	回答	小学校 (%)		中学校 (%)	
		小田原市	全国	小田原市	全国
体育/保健体育授業で、努力を要する児童・生徒に対する取組					
授業中に児童生徒に合った場やルールの提示をしている	している	95.7	81.8	80.0	73.5
友達同士で教え合いを促している	している	82.6	86.7	90.0	82.9
授業中に自分の動きを映像で見られるようにする	している	47.8	31.0	40.0	36.0
体育授業について					
授業中のICTを活用している	小のみ(全ての学年で)活用している	4.3	8.5	70.0	77.3
体育/保健体育授業以外での取組(平成30年度)					
体力・運動能力の向上に係る取組	行った(一部学年を含む)	91.3	92.8	60.0	63.3
アスリートによる講演や実技体験等の実施	行った	50.0	29.6	71.4	21.0

本市小中学校の体育学習では、その運動・種目の特性や児童生徒の学習状況に応じて、場やルールの設定を工夫しています。また、協力したり助け合ったりする時間や課題を設定したり、意図的に仲間との関わりをもつ場面を設定したりすることで、友達同士での教え合いを促し児童生徒の主体的に学習に取り組む態度の育成を目指しています。

今後、児童生徒に合理的・科学的に課題を解決しようとする力を育むことも求められており、そのためにはICT機器の一層の活用を図るなどの学習方法の工夫が必要であると考えています。

また、児童生徒が運動に親しむ機会(時間・場所・仲間)が失われつつある現在では、体育学習だけでなく教育活動全体をとらえて自ら運動に親しみ、生涯にわたって健康な生活を営もうとする態度を育成することが重要であることから、引き続き、運動・スポーツに対する関心・意欲を高めるアスリートによる講演や実技体験等の取組を推進していきます。

7 今後の主な取組

- 各学校においては、「新体力テスト」等により、児童生徒の体力・運動能力の現状を把握し、その結果を体育・スポーツ活動等の指導に活用していきます。
- 体育/保健体育の学習において、児童生徒の主体性を高める工夫に努めるとともに、運動・スポーツが苦手と感じている児童生徒への指導・支援について工夫・改善していきます。
- 市教育委員会において、体力・運動能力向上指導員や著名なアスリートを小中学校へ派遣するなどして、児童生徒の体力・運動能力や運動に対する関心・意欲を高める取組を推進します。
- 市教育委員会において、東京オリンピック・パラリンピックの学校連携観戦チケットを中学校に配付し、生徒の体力・運動能力やスポーツに対する関心・意欲を高める取組を推進します。 *令和2年度のみ
- 児童生徒の体力・運動能力の向上に向けた情報提供に努めます。